

# 古本夜話

顧問教官 金 沢 直 人

「水戸市内で、いちばん多い商店は何屋さんだろうか。食料品を商う店か、衣料品を売る店か」、多分そんなところであろうが、よくは知らない。しかし、いちばん少ないのは、はっきりわかる。古本屋さんである。「義公様以来の文教の府、水戸」などと、いまさらヤボはいりつもりもないが、すこしはわびしい気がしないでもない。

ここまで書いて、用事のために一日筆を止めていて、きょう（二月二五日）の朝日新聞の夕刊をみておどろいた。わたしは古本屋のことを書きだしたのを応援してくれたわけでもないし、水をさしたわけでもあるまいが、なんと古本の高い話が出ているではないか。特に明治文学関係のものが高値をよんでいるというのである。いろいろ出ていたが、いちばん高いのが北村透谷の「楚囚之詩」。新書判ほどの大きさに二十四頁の本。それが七十万円だという。そして曰く「一万円札で本を作ってもかなわない。」と。わたしは毎月の月給袋の中の一万円札の数を考えて気が遠くなるような思いだった。

「大きくなったら何になるの。」とは、よく大人たちがこどもにきくものだ。わたしがどう答えたのかはさておいて、現に大人になってしまったわたしはご承知の通りである。この職業

にはいるとき、金もうけにはならないことは百も承知、二百も合点。それにしても、学問研究というものが、こんなに金のかかるものだとは思わなかったと嘆くことが多い。明治文学など専門にしないですこしは助かったとじょうだんもいたくなる。

わたしが古本を買うことを覚えたのは東京に遊学（文字通りに解釈して結構です。）してからである。学校のホールは食堂や売店や、英大のホールと似たようなものだったが、古本屋も一軒出ていたところは違っていた。かねて話には聞き、物の本でもみていた神田の古本屋街を歩く楽しみも覚えた。だんだんに神田以外の、思いがけないようなところにある古本屋も知るようになった。

古本を買うとき、同じ本なら一銭でも安いのを買おうとして、ならんでいる古本屋の店を行ったり来たりしたものだ。勿論、大体の相場があるから、どの店の値段もたいした違いはないのだが、すこしの破損や、古さの具合で読むにはさしつかえないが、値段がすこし違うこともあるのだった。

気の弱いわたしは、値切るセリフがどうもうまく出なかった。だまって店員にさし出して顔をみると、向うも心得たもので、「そうですなあ。」などと、表裏ひっくりかえしてみながら「○円にしておきましょう。」などといったものだった。

有名な本で、是非手に入れたいとさがし求めている本をみつけるのもうれしくはあった。だが、もっとうれしく、なにかほのぼのとした満ち足りた気持ちになるのは、場末の小さな古本屋などで、今まで名も聞いたこともないような本で、しかもおもしろそうだと自分で思う本をみつけたときだった。

これは学生時代のことではなく、終戦直後のことだったが、土浦の古本屋で、伊波普猷の「古琉球」をみつけたことがあった。これはひどく破損していて、表紙も背も裏表紙も、とにかく外がわはみな無くなっていた。だから店の棚にならんでいても、ただ薄汚れた糊のあとと綴じ

糸のあるせなかが見えるだけで、何の本かわからない。なんだろうと引き出してみると「古琉球」だ。一瞬ハッとしたが、何喰わぬ顔で、はげ頭でひげづらの店のおやじの前に本を出したら、敵もさるもの、「あ、これを見つけたか。これは安く売れないぞ。三十円。」というわたしは胸の中で「コンチキショウ」と思ったが、買ってきた。終戦後間もない頃で、三十円も今の三十円とはわけがちがうのだった。

古本屋に売ったことは一度しかない。これは学生時代のことだったが、ある時、金が一銭もなくなった。学校へ行く七銭の電車賃もない。登校の仕度をして出ると、いつものように電停のほうへ歩かないで、吾妻橋から隅田川の向うへ渡って、とある小さな古本屋へ入った。そして用意してきた火野葦平の「土と兵隊」を売った。いわゆる支那事変の頃で、この本が出たばかり。すぐ買ってすぐ読んで四日目ぐらいだった。たしか新本定価六十銭だったが、四十銭で買ってくれた。これで電車賃も飯代も、二日はだいじょうぶというわけである。

明日が締切りというレポートを書きかけて、必要を感じて夕方頃に、仕事途中で神田まで飛んで行って古本屋で参考書を買ってきて、また書きつつけるなどということもあった。水戸ではこんなわけにはいかないけれど、学校の休暇の時など、上京して古本屋を歩いてみることも、あなたたちにすすめたいことのひとつである。買う買わないは別としても、古本屋を歩いていると、学問に対する妙な闘志のようなものがわいてくるのは不思議である。新本屋へ入ったときは、たしかに感じが違う。

ところで、公孫竜の白馬非馬論ではないけれど、古本屋は本屋ではない。警察？から古物商の鑑札を受けて営業している古物屋であることは知らない諸子も多いかもしれない。知ったからとてどうということもないが、古本も法的には紙くずなみの扱いである。それが二十四頁七十万とは、高い、高い。呵呵。